

---

# バイブル

YUIKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
バイブル

【Nコード】  
N6597B

【作者名】  
YUIKA

【あらすじ】  
とりまホントの話です。 よんで下さいww

あなたは友達を信じますか？

出会い

ともだちつてさ、そんなたいしたもんじゃないと思う。ってか必要  
なときに使えばいいじゃん。ともだちつてのは、利用するもんな  
だよ。そして、アタシが軽蔑すんのは、「信じてる」って言葉を使  
う奴らだ。結局ひとり。でもそれでいいと思う。なにがアタシたち  
をそんな風に変えてしまったのか…。人はたったの一年で大きく変  
わるものなんだ…。例えば中学校に入学してからの1年間でいろん  
なことがあった。一番変わってきたのは三学期のはじめ頃から。も  
うすぐ2年になるうとする。ゆいかはいつも通りの感じ。中学一年  
最近家庭の事情や学校でのことでイライラがたまってきた。2学  
期こいつとトラブってたけど、今はフツーに話している。マナミと  
はなんでもできる。そしてこれがアタシとマナミがよく話すきつ  
けとなった。「次理科や〜ん。やだー。出たくない。」「ねね、保  
健室行かん??きちいー。」「おお!いいね。行く行く。」「すぐア  
タシの考えにのったマナミは急いで保健室へと向かった。しかし…。  
追い出されてしまった。すでに授業は始まっていて、授業だけは受  
けたくないと思いついた。「ねね、じゃあさ、サンキ  
行かん??」「サンキはこの学校の裏階段から降りてちよつと行つた  
所にある雑貨店。マナミはすぐ行くと行って、誰もいない事を確認  
して廊下から裏階段へと急いだ。「なんか楽しくね??こういうの。  
」「マナミが興奮しながら言った。「どうする??サンキ行つてから  
」「ん??なんかキーホルダーほしいんだよね。おソロのにしよっ  
か?!」「マナミはニコニコしながらそう言った。「いいね。そうし  
よ。」「そしてサンキでアタシとマナミは盗みを犯した。万引きした  
んだ。でもぜんぜん罪悪感なんて感じなかった。感じたのはただ、  
快感だけだった。「ん〜!きつもちい〜!!」「だねえ〜!!」「こ

の日二人はすぐに仲良くなった。まだ純粋な心を持っていた一月。それから一ヶ月、アタシとマナミはずいぶん汚れた。たばこは吸うし酒は飲むし、他中のやつらとトラブったし。今のアタシたちに怖いものなんかなかったんだ。

## 傷

### レイプ事件

「ゆいかなぁ、帰るおう！」マナミが駆け寄ってきた。「いいよお！ねね、サンキ行こ！」「おお！いいねえ！」そして学校帰りにサンキによる事にした。「ねえ、ゆいかってさあ、好きな人とかいないの??」「え？アタシが好きな人作ると思う??大体アタシ別れたばかりだし。」「あゝね。お前坂野のこと嫌いだったもんね。無理して付き合うけつちゃあ！」「まあねえ。」坂野とは少し前別れたアタシの元カレ。うざいからいつも文句言ってる。「ねえ…。あの車なんかやばくない??」マナミがいきなり足を止めた。「え??なんで??」「なんか…。こつちじろじろ見てるし…。まじキモっ!!」マナミは急ごうと言ってその車の横を早々と通りぬけようとした。アタシはレイプなんてされるわけないしなあと思いつながらマナミについて行った。ドツツ!!!!!!後ろから叩き付けられるような激しい痛み…。アタシはすぐにこの状況を判断できた。逃げたいけど力が抜けてなにもできない。マナミ??マナミはすでに気を失っていた。逃げる事もできず男に体を引きずられて車に引き込まれた。「ツ!!」中にはタバコの煙と男が4人いた。どうなるんだろ…。その時はとにかく怖かった。「悪く思うなよ??つてかお前等処女か??」「処女??いいねえ新鮮って感じで!」「なんだよこいつら!!まじぶん殴るぞつ!!」と思いつつも力が入らない。ああ…レイプだ…。早くやれよ。この日すべてを捨てたアタシ。マナミも同じ気持ちだったろうか。「あつ…ん」だめだ。早く終われ!!もうだめだ。「早くなめろよ!!」「うツツ!!!!!!」「しなかったら殴られて反抗しようとしたら無理矢理フエラやらされてもう耐えられなかった。」「はあはあ…。」「男の吐息が顔にかかる。うえつ…。キシヨ!!」「じゃあ、入れるから。」「えっ?!やっ!!ちよつと!!」「無理矢理足を開かれた。」「あつ。あ

「ッ！！はあんっあんああんっ」泣く事しかできなかった。運良く中出しはされなかった。はあ…。やっと終わったんだ…。マナミ？？！！「ちよっ！！！！マナミ？？！！」「うるせえよっ！！今降るすから静かにしてろ！！！！」「こいつらをどれだけ憎んでも憎み足りないだろう。アタシとマナミは知らない道路に投げ落とされた。」「ッっ。」「からだ中が痛い。」「マナミ？？大丈夫？？？」「マナミは立ってられない状態だった。」「ゆ…いか？？？」「中出しされてない？？よね…？？」アタシがそう言っただけいきなりマナミの表情が変わり震え出した。」「ねえ…まさか…出されたの？？中で…」「マナミはまばたきもせずただ一点を見つめ震えていた。」「こわ…かったね…。」「アタシは残っている力を振り絞ってマナミを肩に寄せた。」「ここどこだろ…」知らない場所。暗くてよく見えない。誰か助けて…。誰か…アタシは立つ気力もなくなりその場にうずくまってしまった。フワッ。何かがアタシの背中を包んだ。」「へっ…？？」さっきの奴等か？？やだ…やだ…。」「そこジャマなんだけど。」「男の声。誰？？暗くてよく見えなかった。」「あ…ご…ごめんなさい…。」「いいけどさあ。アンタなんでそんなところで倒れこんでんだよ…まあ何があったか大体わかるけどな。」「アタシは我慢できずに泣いてしまった。」「うっ…」「グスンッ…」「怖かったよお…っ。」「怖かったな…。」「そいつは一言そう言っただけアタシを抱きしめてくれた。

## ともだち

「俺のうち来いよ。落ち着いたら家まで送るからさ。」「うん。」  
アタシは自分で立ち上がった。男はマナミを抱えてくれた。マナミの体はまだ震えている。夢じゃないんだよね。「そこらへん座つて。」「親は??」なにげなく聞く。「海外で仕事してるから。めつたに帰つてこねえよ。」「へえ。」よく見るとそいつはアタシたちと同じ歳くらいで制服をきている。「中学生??」「ん???そっうだけど何か??」「え??いや何も。」意外とかっこいい。「寒いだろ??これ着とけ。」そいつはアタシに1枚の毛布をかけてくれた。「今温かいもん入れるから。ちよつと待つてろ。」優しい香りがする。「あ。ねえ!名前は何?」「いきなりの質問に戸惑う...」  
「ゆいか。中1。」「ゆいかね。わかった。俺カズヤ。中1。もう一人の奴は今上で寝てんからさ。心配すんな。」ホントに優しい...。そしてどこか暖かい。カズヤはよく見ると震えていた。「あ...。カズヤ寒いんじゃない???」申し訳なさそうに言う。「俺はいいから!!それよりお前だよ。風邪引いてないか??」「アタシは全然大丈夫だから!!カズヤのほうが風邪引いちゃう...」。「いつときアタシとカズヤは見つめ合った...」。「じゃあさ、抱きしめてくれる???」カズヤはホントにかっこいい。こんな奴この世にいたのかというくらいだった。でもやっぱり柄悪いし、いかにも不良って感じの格好...。でもカズヤの優しさにアタシは逆らえなかった。しばらく抱き合った。ビクッッ!!!!!!!!!!!!!!頭を走る痛みと恐怖...。押し倒されるっ!!!!!!!!!!!!!!あの時のことがめに浮かぶ。怖い。震えが止まらない。恐怖のあまり目をつぶった。「お前今日泊まっていけよ。そんなに震えてたら夜道も歩けねえだろ??」「目を開くとコーヒーが置かれていた。「あんまし無理すんなよ???もう寝ていいから。俺ここいるし。」「ありがと...。でも、アタシは大丈夫だから、マナミのそばにいて...。お願い。」今は男

のことなんか気にしていられなかった。とにかくマナミのことが気になってしょうがなかった。「じゃあゆっくり休めよ。」「うん。」「ガチャッ…。ドアをあけると…。マナミがいない。」「どこに行ったんだ??!!」「見ると窓が開いている…。」「ま…さかな…。」「カズヤはおそろおそろ窓に近づいた。

## 恨み

この日マナミは死んだ。自分から飛び降りたんだ。葬式。アタシは自分の友達が死ぬなんてありえないと思っていた。マナミの死を受け入れられなかった。「ゆいか？マナミちゃんのお葬式今日あるんだって。ちゃんと出なさいよ？……」。マナミが死んだ？？死んでない。マナミはちゃんと生きてる。生きてるんだ！学校にも行く気になんねえ。ガラッ……。「ゆいか！！！」声をかけてきたのはゆかだった。「最近ずっと学校休んでるから……心配したあ……。マナちゃん今日葬式だね。来るでしょ？？」……。「ま……まあ考えといてね！」なんだよいつもこいつも。「じろじろ見てんじゃねえよ」ペツ。つばをはく。ボーっとしているとなんか気になる話が聞こえてきた。「ねえ、なんかマナミレイプしたじゃん？？あれで中出しさせたら精神的におかしくなっちゃって窓から飛び降りたらしいよあ……」「うつそ……。ちよつとやりすぎなんじゃない？？」「うん。」「ガッッ！！！！アタシははなしていた奴のむなぐらにつかみかかった。「てめえその話よく聞かせる。」「えっ……。でも……。」「死にたくなかったら言えクソッ！！！！」「わ……わかったよ。」「坂野のしわざだよ。」「なんで坂野が？？？」「ってかさあ、ゆいかアンタが悪いんじゃないの？？アンタが坂野にいろいろするからだよ。坂野アンタのこ本気で好きだったのに」「坂野がやった？？アタシのせいでマナミが……？ツツツ……。ああ……………っ！！！！！！！！！！」「ウソだ！ウソだうそだウソだあああ……………！！！！全部うそだよ……………！！！！なんかの間違いだよっ！」「坂野……………！！！！！！坂野どこだよ……………？？ちきしょー出て来いっ！！」「このときは坂野をぶん殴ることしか考えてなかった。」「坂野っ……………！！！！！！」「坂野はしけた顔でこつちを振り向く。」「てめえふざけんなよ？！」「アタシは坂野のむなぐらにつかみかかった。」「なんだよ！放せっ。」「ふざけんな……………！！！！てめ

えがアタシになんかすんのは勝手だけど、マナミまで巻き込んでん  
じゃねえよ！……！」「お前が悪いんだろ？俺にいちいちさしず  
すつからじゃん。まあおおまかに言つと、てめえのせいであの女は  
死んだってことだな。」「殴る事ができなかった。自分がマナミを巻  
き込んだ。」「アタシのせいだ。」「俺がお前のことあきらめるわけ  
ねえだろ？？また大事な人がこんな風にされなくなったら俺のと  
ころに来いよ。」「……………。力が抜けて行く。また大事な人がいな  
くなる。」「そんなのいやだ。」「聞いてんのか？ゆいか。」「……  
。」「まあ考えとけ。」「坂野は笑って過ぎ去った。」「うつ……ちき  
しょう。」「泣く事しか出来ない。くやしい。ジーツ、ジーツ、ジ  
ーッ、着信が鳴る。」「はい……グスッ。もしもし？」「あ、ゆいか  
？？」カズヤだ。」「何？？どうした？？」『泣いてんのか？？今  
行くから！』」「……………。」「愛しい者がいなくなる。」「カズヤまで  
いなくなる。」「アタシと一緒にいたらカズヤが。だめだ。」「アタシ  
どうすればいいんだよ。」「わかんねえよ。わかんねえよ。」「わかん  
ねえよっ！」「泣きくずれた。」「ゆいかっ！」「カズヤ……。だめだ  
よ……。もう会えない。」「アタシのせいで大切なものがなくなっ  
てしまっ……。人の気配がする！！坂野！？後ろのほうで睨みつけてい  
るのは坂野だった……。もうだめだ。もう会えない。」「どうかした？？」  
「ねえ……。もう、来ないで。」「え？？？どういう意味だよ？」「と  
にかくアタシのここに来ないでよ。迷惑！」「そういつて走り出した。  
坂野の元に……。」「てめえ、あの男に手出したら、お前のことなんか  
考えもしねえから。」「はいはい。何キレてんだよ。」「グイッ！」「  
ツッ！」「いきなりアタシの腕を掴む坂野。」「でももう待てねえな。  
答えを出せ。あの男に手だしてほしくなかったら俺のもんになるん  
だ。」「カズヤ……。」「ごめんね。」「いいよ。アンタのものになつて  
やるよ。でもそのかわり、アタシ以外の人間に手出すんじゃないぞ  
？？出したらてめえまじで殺す。」「はいはい。てめえは俺のもん  
だよ。」「坂野は笑ってカズヤのほうをみながらアタシにキスをする。  
カズヤ……。」「ごめんね……。アタシアンタが好きだ。坂野は恨ん

でも憎んでも足りないだろう。でもこれでカズヤが助かるんなら、  
もう何もいらぬ。涙が頬を伝う。カズヤは失望したようにその場  
を去って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6597b/>

---

バイブル

2010年10月22日11時58分発行